

日本の社会における「家」制度の研究

——野積における「三十六人衆」を中心にして——

浅 妻 康 二

県立新潟女子短期大学社会科学研究室

On Family System in the Society of Japan

——Research into “Sanjurokuninshu” in Nozumi ——

Koji Asazuma

Department of General Education, Niigata Women's College

わが国における国家制定法と現実の社会生活の間には、かなりの距りがある。国家制定法が市民社会の近代法として、日本の社会にどう定着するかを考えるならば、現実になお根強く存在している伝統的規範関係が生きているので、「封建的だとか」「近代的」という包括的概念で、言葉だけで満足して断定することは出来ない。

一般に人間の行動や意識は、法律が変わったからと云つて、直ちにそれに規制されるものではない。国民の大部分は「自分達の社会連帯生活のうえに、もつとも大切な法律を、その一条項さえ、ろくに知りもせず、また知ろうともしないで、結構暮している」¹⁾。それでは無規範の生活であるかという、決してそうではないので、無意識的、条件反射的な行動には、反つて選択の余地のない下から形成されている一定の行動様式がある。そして、一見固定的に見えるけれどもそこには発展消滅のうごきがある。国民はこうした規範の歴史的 성격や構造を反映し、対応している。一方上から形成された国家制定法にも対応しようとするうごきがある。そこには社会的緊張や対立すらみられる。

この距りやうごきをどう測定したらよいのか。いますぐに結論を出すよりも、いま一度丁寧に日本の社会の内部に立入つて現実社会の事実を検証し、内在的な論理の展開が試みられなければならない。ここでは、社会関係を規律し、成立せしめている法的慣行の実体を必ずしも慣習法という法概念で峻別せず、「しきたり」「道徳」「習俗」「慣習」など、互に補足して多かれ少かれ命令規範的なものを「生きた法」として考えてみることによつて、国家制定法とどのような関連があるかをとりあげたい。

近代法が「人が自らの人間としての価値を自覚し、自ら独立の価値ある存在として意識すること、自ら何ごとにも隷属せぬ独立の存在者」²⁾の「権利」のカテゴリーに象徴される「法の支配」であるとするならば、日本の社会に果して「法の支配」がそのまゝの形で浸透するであろうか。現実には「隣保団結の生活に養成せらるべきは、遵法の精神である。」という意識が強い。「かゝる遵法の精神の根基は先づ家の生活に於いて培われるのであるが、公共の生活の中にその精神は一層深く涵養せられる。即ち各種の規程・規則等が、隣組・部落会・町内会等の行動を律し規定するところに、自ら遵法の訓練が行われる。遵法の精神が国民に徹底すれば、国家秩序は確固たるものとなり、国策も円滑に遂行される」³⁾はたゞ単に戦時中の教学精神の国民的常識とだけ割切れない。日本の社会における、「家」—「公共の生活」—「国家」の関係はいまも根強く、とくに農民は共同体的

規制を受けている。これは農村のみの問題でなく、日本の社会全体としても考えられなければならない問題であり、日本の社会をしんに前進的なものに転化させるためにも解明されなければならない問題である。

「家」を中心にした規範関係を明らかにすることことは、問題接近の一つの方法である。それは家族制度として考えてもよい。そしてそのすぐれた研究も多い。家族制度は各人がそれぞれの概念をもっているが、イデオロギーや法律制度と考えるのが、一応の概念であろう。しかし、家族制度の機能を考えるならば、日常生活においてはイデオロギーや法律制度でみごとに割切られている以上に、複雑な機能をもつて生きている。家族制度や「家」の概念規定も問題であるが、ここでは国民のなかに素朴な形で生きているものとして一般的に「家」という概念から考えてみたい。そこから理論的再編成することも、いまの時代に必要なことである。

この観点からの研究調査は数多く進められているが、一般論を成立させるためにはなお多くの

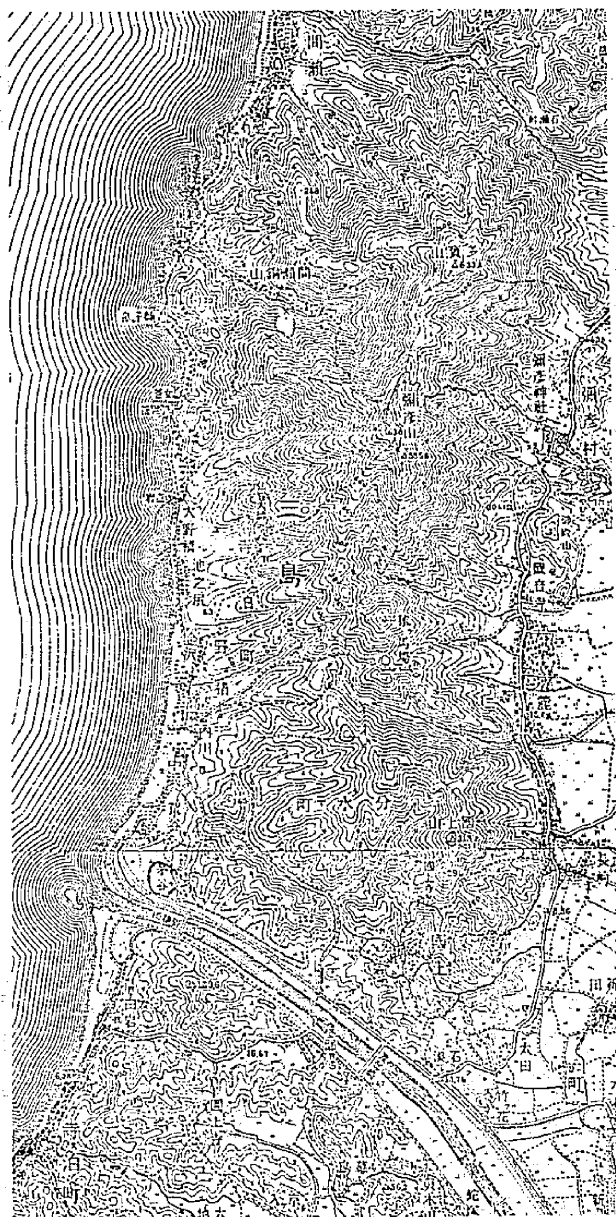
モノグラフをとりあげて地域差の測定が必要である。ここでとりあげた、新潟県三島郡寺泊町大字野積における「三十六人衆」の研究調査は、その一つの手がかりである。

野積の社会的背景

野積のはじまりについてはさまざまに伝えられているが、いまここではふれない。明治22年野積村となり、明治34年寺泊と合併し現在に至っている。行政的には寺泊町大字野積ではあるが、生活圏や意識としては野積「むら」である。さらに、日常生活を規制しているのは、野積「むら」を構成する8つの「部落」である。大河津分水の河口から南北に日本海に沿って、茅ヶ谷(28戸)、荒谷(87戸)、中浜(43戸)、内川(33戸)、高屋(20戸)、金沢(36戸)、池之尻(42戸)、大野積(10戸)の8つの部落で野積(299戸)「むら」が構成されている。

耕作面積が狭く農業だけで生活は維持出来なかつた。いま野積の特徴をよくあらわしていると云われている大野積、池之尻と、割に新しい成り立ちを示している内川、についてみるとつぎのような姿がみられる。

平均耕作面積3反そこそこで、農業現金収入も30万円以下という状態では他に収入の道を得なければならず、農業外の労務者として収入の道を拓かなければならなかつた。



	耕 作 面 積				総所得に対し農業所得の示める%				農 業 現 金 収 入			
	15反 ～10	10～5	5～3	3～	100～90	90～50	50～10	10～0	50万円	～ 30	30～10	10 ～
大野積		57.1%	28.6%	14.3%	0	28.6%	28.6%	42.8%				100%
池之尻	5.6%	42.9%	22.9%	28.6%	0	2.9%	71.1%	25.7%			5.7%	99.3%
内 川		20.8%	25.0%	50.0%	0	8.3%	62.5%	25.0%			41.6%	54.1%

大正年代までは漁業を中心にして来た。漁業と云つても砂丘地帯なので大型漁船の使用が出来ず、間瀬や出雲崎のように鰯場漁業がなかつたので、大羽鰯（4月～6月）ひらめ（2月～3月）漁が主なものであつた。漁のない時期には杜氏を中心とした酒造りや屋根葺の出稼ぎの習慣があつた。それが大正末期になると、漁業も衰退して来た。部落のひとつは「大河津分水の完成（大正12年）とともに淡水が流入するようになって魚がとれなくなつた」と云っている。これは大河津分水の関係よりは、第一次世界大戦後の日本経済の変化で、漁業の面でも機械化が進み、沿岸漁業が衰退した、一般的傾向とみるべきである。漁業の衰退とともに、副業的出稼ぎの収入が生活を支える主なるものとなつた。特に杜氏を中心とした酒造りの出稼ぎが圧倒的に多くなつて来た。「野積の杜氏」という伝統が基きあげられ、全国的に進出している。昭和30年の統計によればつぎのような状態である。

この表には時期的な重複があるので、実数としては、その半数とみてよい、中学を出れば男の子はそれぞれの縁故を頼つて働きに行くので、野積では殆どの家が何らかの型で酒造りの出稼ぎと関係がある。酒造りの世界では一人前になるには5～6年かかり、杜氏になるには15～6年はかかる。杜氏の収入は、40万円位の収入をあげている者もあるが、普通10万円前後、三役で6～7万円前後である。

野積ではわずかな農業と漁業で自給の足しにし、あとは出稼ぎ収入によつてゐる。

酒造りの世界は、いまでも企業形態に古いしきたりを残しているので、杜氏——三役——下働きの階層があり、部落の構造を反映し、出稼ぎの影響は部落にはそれ程強くはみられない。

出稼ぎ先	杜 氏	三 役	下 働 き	計
栃 木	3	9	23	35
群 馬	5	15	25	45
長 野	3	9	9	21
新 潟	34	100	192	326
京 都	1	2	3	6
滋 賀	1	2	2	5
北 海 道	14	42	153	209
福 島	3	9	12	24
愛 知	5	15	30	50
静 岡	7	20	25	52
三 重	2	6	11	19
岐 阜	7	20	22	49
石 川	1	2	4	7
富 山	11	25	24	60
岡 山	1	2	3	6
計	98	278	538	914

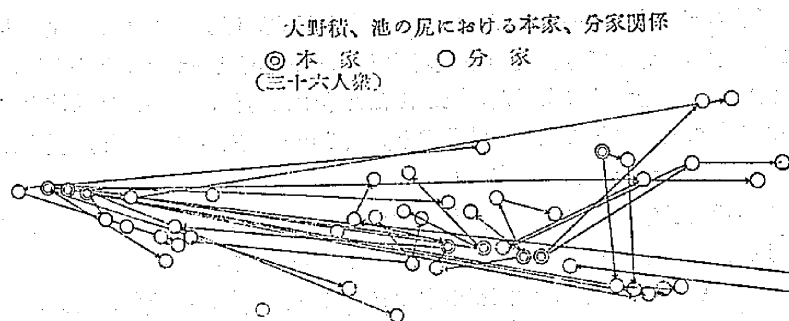
「三十六人衆」を中心とした部落構造

野積の部落構造を象徴的に示しているのが「三十六人衆」である。部落では「おゝやけ」又は「おもだち」と、「こやけ」又は「こまえ」という呼称がある。これは本家・分家と云つてもよいのであるが、それを「おもだち」「こまえ」と階層的な社会評価を含んだ呼び方をしている。「おゝやけ」「おもだち」と呼ばれるのが36軒あるので「三十六人衆」（「三十六人」ともいう）と呼んでいる。現在は2軒没落して34軒であるが、昔からの慣行として「三十六人衆」と呼んでいる。

現在「三十六人衆」と呼ばれる「家」はつぎのようになっている。

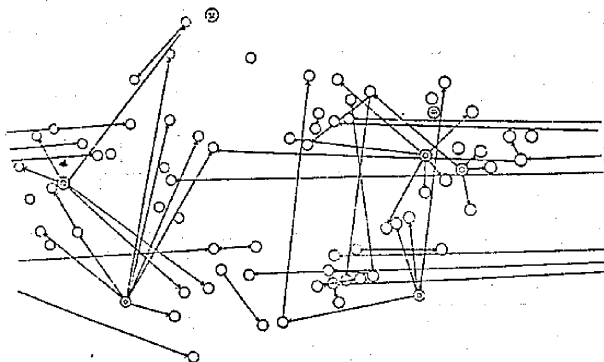
部落名	部落戸数	「三十六人衆」名	部落名	部落戸数	「三十六人衆」名
大野積	10戸	青木 政吉	高屋	20戸	松井 幸一郎
〃	〃	石井 清吉	内川	33戸	加藤甚五右エ門
〃	〃	高津 金五郎	〃	〃	石井 初太郎
池之尻	42戸	石井 勇	中浜	43戸	力石 安松
〃	〃	高津 文平	〃	〃	高津 甚五郎
〃	〃	石井 仁三郎	〃	〃	大倉 常太郎
〃	〃	高網 三作	〃	〃	藤井 大五郎
〃	〃	藤井 三太郎	荒谷	87戸	河合 清
金沢	36戸	深滝 治平	〃	〃	河合 徹四郎
〃	〃	青木 作治郎	〃	〃	風間 四郎
〃	〃	青木 重三郎	〃	〃	古川原 政雄
〃	〃	青木 惣三	〃	〃	志田 昇
〃	〃	深滝 亀太郎	〃	〃	河野 薫
高屋	20戸	青木 高市	〃	〃	風間三五右エ門
〃	〃	松井 寅治郎	〃	〃	加藤 惣一郎
〃	〃	松井 市右エ門	〃	〃	河合 熊一
〃	〃	松井 市郎平	〃	〃	河合 熊五郎

これを大野積、池の尻、内川、中浜を例にとつて、「三十六人衆」（本家）を中心にした、分家の結合関係をみるとつぎのようになる。



内川、中浜における本家、分家関係

◎ 本家 (三十六人衆) ○ 分家



1. 家族関係からみた「三十六人衆」

大野稔、池之尻は野積「むら」の発生地と云われただけに、本家分家の結合は緊密で、それぞれの部落内で10軒前後の結合関係がみられる。その系譜関係は同一部落内で展開しているので、地縁と血縁が全く一致すると云つてよい。内川、中浜においては部落の成立も池之尻に比較すれば新しいので、結合関係も5軒前後とその集団は小さい。しかし、地縁と血縁からみれば、内川は内川の地域内に、中浜は中浜の地域に限られ、内川と中浜の地域的境界と血縁的境界は完全に一致している。「本家分家末代、親類三代」と云われ、本家分家の系譜が尊重されているが、婚姻関係も「うちうち」（12頁参照）が多いので系譜関係と親類関係が重複しているので、その結合関係は強化される。そこには家族主義を背景にした部落構造がみられる。

ここで部落構造をあきらかにするために、その背景となる現実の家族構成をみる必要がある。家族構成人員平均大野稔 7.3、池之尻 7.1、内川 5.5 は全国平均 4.9 に比較すれば、はるかに大家族構成である。

家族構成からみれば直系尊属及びその他の傍系血族を含むものが多く、直系三世代あるいは複合家族の構成が極立つて多い。

特に、「三十六人衆」の家では直系三世代の構成、あるいは複合家族の構成が多い。二三の例をあげるとつぎの通りである。（家族関係の呼称は戸籍によらず農業サンセスによつた。そのほうが現実の家族関係をみるによい。）

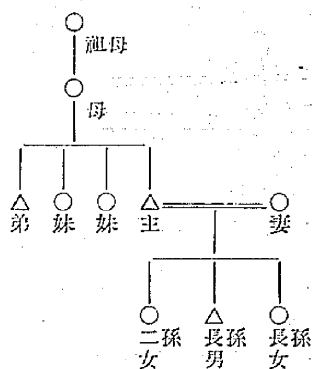
	全国平均	池之尻	大野稔	内川
世帯主	100	100	100	100
同配偶者	76.3	85.7	85.7	75.0
直系尊属	231.6	337.1	185.8	220.8
同配偶者	9.0	31.4	22.8	12.5
直系尊属	18	48.6	71.4	62.5
その他	18.3	48.6	57.1	37.5

K家の例は野積の伝統的なものとして、いまでも家父長の原理が守られている。近代家族が夫婦中心のものに移行するといつても、それを実現するだけの経済条件がそなわらなければ一挙に実現するものではない。分家をするにも「なんだかんだと争つた揚苦、出る時は茶碗七ツ、小皿五枚、箸十ぜん、着のみ着のまゝよその家へ一寸間借り」（ひかり第三号より）と、現実には容易でないで、よほどの見通しがつかないと、分家はしない。

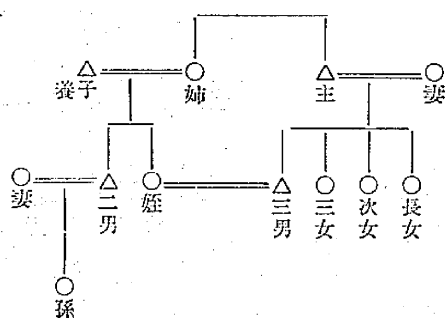
I 家の場合も最近弟が分家しているが、部落内で商業を営むようになった。そこには家父長原理だけでは包括出来ない、家族関係の複雑さのあることは見逃せない。

分家するには貧しい条件なので、大家族の中でまとまろうとする。それは漁業における家族労働を確保しようとする伝統でもあつたが、「三十六人衆」のように分家しないでやつてゆけるところは古い型を維持している。T家のような同じ家に生活する従兄妹の婚姻は「うちうち」の婚姻と云っている。

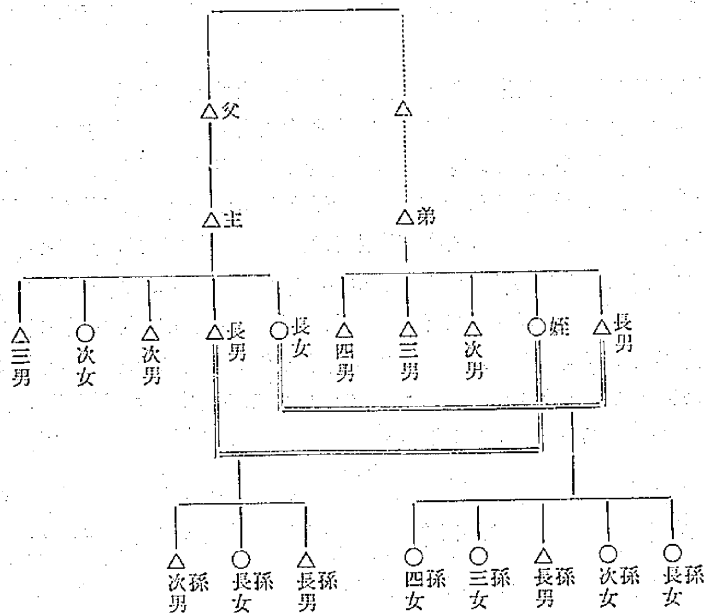
K家の例



T家の例



I 家の例



通婚圏をみるとつぎのようになっている。「うちうち」というのは同一「家」内での婚姻関係をいう。
(T家, I家の例)

	池 之 尻		内 川	
	親の世代	子の世代	親の世代	子の世代
「うちうち」婚	8 (23%)		1 (5%)	1 (5%)
同一部落内婚	16 (46%)	4 (14%)	5 (24%)	4 (18%)
野積内婚	8 (23%)	19 (66%)	14 (67%)	17 (77%)
野積外婚	3 (9%)	6 (21%)	1 (5%)	

「三十六人衆」の伝統の強い池之尻の方が通婚圏が狭く、「うちうち」で固まろうとしている。親の世代に対して、子の世代の方が通婚圏は拡大されている。しかし、それとても野積内が大部分で、野積としての閉鎖性を完全に展開するまでにはなっていないので、伝統的なものを維持し「閉ざされた社会」としての共同体的性格は、家族関係からも生れて来る。

2. 漁業関係からみた「三十六人衆」

部落の「風俗習慣も漁業に関したものが多く、漁業が如何に重要視されたか物語るものである」と云われるように、部落の構造のなかに漁業を背景にした社会的条件がかなりのウェイトを占めている。

「おゝやけ」「こやけ」は本来本家・分家の系譜関係から生れたものである。36軒の本家の発生については明らかでないが、「三十六人衆」の一人R家にある記録⁵⁾によれば、組長源之助とある。文化の頃には、本家は草分け本百姓であり、五人組の組長であり、貢租負担者であつたとみられる。そうした「三十六人」の組長寄合制度が、野積の村落構造の原理となつたものと思われる。

その本家が部落の生産の中心としての漁業における「あみもと」であつた。分家する場合は「あみもと」(本家)に対して「かこ」(舟子)として本家の舟に乗込むことを条件として土地の分与が行われている⁶⁾。分家は本家に対して必ず一人は乗組員を出さねばならず、万一都合のつかない時は人を頼んでも乗組員を出さなければならなかつた。耕地の狭い野積では「鯛は米だ」と云われ

る程、漁業は大切なものであり、土地はさらに貴重なものであつた。本家・分家の系譜関係は「あみもと」・「かこ」の漁業関係であり、土地分与の恩恵による土地所有関係という経済的背景をもつものである。

漁業における出資額のことを「まいすう」（枚数）と呼んでいる。舟は「あみもと」の出資で、漁具は乗組員の共同出資である。乗組員は本家を中心とした家族労働で、その構成は、本家2人、分家5人、本家・分家で足りない時は縁故者を乗せる、8人の乗りである。そこには当然本家の大家族構成が生れて来る。漁業の盛んな時代に養子も多かつた。その頃は信濃川の氾濫で生活に困つた平場では漁村に養子にやつた。附近の平場では「浜にくれてやるぞ」という言葉がいまもある。その分配方法は本家が漁獲の2/10をとり、8/10を乗組員で平等に分配する方式である。本家分家は殆ど同一部落にあるので血縁関係、地縁関係、経済関係が重複してその結合は強いものであり、本家の存在は極立つたものになる。漁業の発展とともに大網になると、さらにその関係は統合されて来る。昭和25年には解散されたが、大網についてみると有力な「あみもと」が結合してつぎのような形に発展している。（昭和11年現在）

網元氏名	舟名	前数	舟子戸数	部落
加藤 藤平 治一 志田 井外	太郎左エ門舟	81.5	40	茅ヶ谷、荒谷
古川 文誠 智郎 吉川	惣左エ門舟	75.0	32	〃
力石 石井 安留三郎 井 井 幸一郎 松 井 亀三郎	中 浜 舟	84.5	53	茅ヶ谷、荒谷、中浜 内川
松 井 幸一郎 井 井 亀三郎	高 屋 舟	45.0	32	内川、高屋、金沢
深瀬 滝 久 蔵 滝 滝 和五郎	金 沢 舟	62.0	31	内川、金沢
高石 津井 崇治 吉三 井 井	新 田 舟	63.0	40	池之尻、大野嶺
合 計		411.0	228	

36人の「あみもと」は12人6組の有力者に統合されている。ここの「あみもと」は、経済的支配関係を通して「かこ」が228戸であるから部落の殆どの人が、いずれかの「大網」に所属しているのである。こうして「あみもと」本家の部落支配は形成されて来る。ここにも血縁と地縁の結合をみることが出来る。

3. 土地制度からみた「三十六人衆」

耕作面積が狭いので、「せめて食うだけの土地を」という意識が強く、漁業関係とともに土地所有関係は、生活の基本を規制するものである。

約4町5反の共有地がある。この共有地は、

大 割（約8畝）——本家

二番割（約4畝）——第一分家

苗代割（約2畝）——第二分家

割出割（約2畝弱）——第三分家

の割合で共有している、4町5反は登記名義は36人の名になつているが、個人の自由で処分は出来ない。分家は分家の際にそれぞれの割合で分与してもらうが使用権があるだけである。「三十六人衆」と雖も、共有地の管理をしているだけである。その土地は割地の慣行によつて、三年毎の抽選で同じ面積を交換する。平均耕作面積3反そこそこであるので、耕作地の全然ない分家もあるので、同一系譜関係「まき」で1反5畝の共有地を管理していることは貴重なことである。分家は本家を通して部落の共有地を与えられるのであるから、本家の分家に対する支配統制と分家の本家に対する服従は強くなる。

部落の人はそういう慣行であるとしているが、「三十六人衆」は「掟がある」というふうに法的意識をもっている。その根拠になるものは「野積重立組合定款」⁷⁾である。「三十六人衆」は大正2年に作製されたというが、資料によれば昭和4年となつている。

この定款によつて土地所有関係を通して「三十六人衆」の部落支配は規範性を強めている。「本組合ノ共有地ハ納税上別冊三十六人持調書ノ通り明治二十一年各自ニ分筆シタル土地ハ抵当物件ニ提出スル事ハ固ク禁スル事」とある。この点は戒能教授が指摘されているように、慣習法について「登記簿上は村内の全耕地が個人所有名義になつて居るに拘らず実際には割地制が行われて居ると云つた事情とか、或いは部落人会地に関する関係等々の如き、恰も客観的に存在する所の半ば実定法的法則を指す」ように考えるのは「郷紳とでも云ふべきか、地方の直接人民生活に影響を与へ得べき有力者のなかにイデオロギーとしてある」⁸⁾と指摘されているが、野積でも「三十六人衆」には実定法的な意味をもっているが、部落の人は何となく「しきたり」に従つて無意識に行動していたので、規範性はそれ程強くない。

この慣行がいま、部落では問題になつているが、規範や慣行が問題になるのは何等かの意味で危機の時代にとりあげられる。この定款も大正2年につくられたというが、記録によれば昭和4年となつている。昭和4年というのは不況の時代で「三十六人衆」のうち2人が破産して共有地の処分を決定しようとした結果が、「共有地ニ対シテハ三十六人タル系伝ニ鑑ミ権利ヲ尊重スルコト若シ破財上止ムヲ得ズ売買セントスル時本組合ノ議決ノ結果組合内ニテ相当ノ価格ヲ以テ受ケ持ツ事」となつた。危機は結果的には「三十六人タル系伝」の名のもとに超世代的な「家」としての「三十六人衆」を実定的なものにまで強化することになつた。1町歩以上耕作しているのが15戸しかないにも拘らず「野積大地主タル三十六人」といつてるところからみても、いかに土地に対する観念が強いかが判る。

3. 部落支配構造からみた「三十六人衆」

野積重立組合定款第4条に「本組合ニ於テ騒乱及ビ地籍ニ関スル争論アルトキハ是レニ立会シ裁決スル事」とある。これを部落の人はつぎのように理解している。「この組合でいろいろのいざこざのある時や、土地のことで争いのおきた時は組合で立会つて解決するということで、組合の争いは、村全体の争いも組合でまとめるということを意味しています」⁹⁾

ここには明らかに「三十六人衆」の「重立」の部落支配原理がある。その原理は具体的にはどう展開しているか。

(1) 「三十六人衆」常会

昭和14年太子講からの批判が起るまで、部落の公的な決定は「三十六人衆」常会によつてなされた。「公を別にして私はないのである。我等の生活はすべて天皇に帰一し奉り、国家に奉仕することによつて真実の生活となる」¹⁰⁾という教養的精神は野積の歴史的な性格から、部落の人達の常識となり、「おもだち」「こまえ」の「分に応じ」て「三十六人衆」常会は自明のものとされて来た。「国策万般の普及徹底に協力する最下部組織とし重要な意義を有する」¹¹⁾「常会」が強調されてくれば一層その存在は部落支配を確立させて来る。

「三十六人衆常会」は、部落の年間行事、予算(万歳といつている)、労働賃金、区長の人選、等が決定された。この決定は本家・分家を通して私の生活にも及んだ。

(2) 区長と「三日でま」

「三十六人衆」常会は戦時中の隣組制度の強化とともに、昭和18年解体して区長制となつた。区長制になつたと云つても、各部落の区長はそれぞれの部落にある「三十六人衆」の輪番になつたので、「三十六人衆」常会と本質的には変りはなく、反つて区長は国策遂行の末端機構として存在を明確にするようになつた。

区長は戦時中の繁雑な仕事をし、男が出稼ぎの野積では、留守を守る女達が区長に頼ることが多

かつた。それで区長は大変だということで、「てま」と称して区長の家に無償で働きに行くようになった。はじめは一日であつたのが、後に三日になつたので「三日でま」と云う。部落では「てまだい」と称して、分家か本家の家に無償労働に行く習慣があつたので、「三日でま」は自然の形で生れて来た。

(3) 氏子総代と「三十六人衆」

さらに、「三十六人衆」を極立せているのが、氏子総代である。部落にはそれぞれ氏神様があるが、その氏子総代には「三十六人衆」のなかでも有力の者がなつている。現在の氏子総代はつぎの通りである。

部落名	神 社	氏子総代	現在役職
大 野 積	山 王 神 社	高 津 金五郎	
池 之 尻	妻 戸 神 社	松 井 寅治郎	
池 之 尻	山 王 神 社	高 網 三 作	町長、杜氏組合長
金 沢	白 山 神 社	滝 沢 治 平	
中 浜	山 王 神 社	力 石 安 松	町議会副議長、郵便局長
内 川	八 幡 様	石 井 初太郎	
荒 谷	弥 彦 神 社	伊 藤 彦 治	東北配電所長
荒 谷	弥 彦 神 社	古川原 政 雄	

部落ごとに氏神を祀り、村びとを氏子というのはわが国の習俗であらうけれども、ここでは根強い制度的なものになつている。その発生については血族集団の祭る祖神的性格をもつたものであるけれども、部落の人が殆ど定着しているので、神社の祭りは部落の人達の生活規範とし緊密性をもち、部落の支配構造とも関連して、部落運営にも重要な機能をもち、そこには氏子総代の存在の意義がある。氏子総代をみると町長、町会副議長などの役職についているので、氏子総代の象徴性がわかる。区長が「三十六人衆」の輪番制になつても氏子総代が世襲性になつているのはその辺の事情を物語るものである。

「三十六人衆」と「家」

野積における部落構造は地縁的結合と血縁的結合によつて部落共同体を形成している。漁業から生れる生産性は単独の「家」では独立性をもたず、本家・分家の家族的結合によつてその生産は維持されて来た。本家と雖も分家の協力なしには漁業生産を行うことは出来なかつた。分家はさらに土地所有関係を通じて恩恵を受け、それが部落共有地の割地という慣行によつて分与されるのであるから、部落の規制を受ける。

野積における「家」は「まき」という同族結合を通して、漁業や農業の生産単位（完全に独立したものではないが）であると共に、大綱や共有地のような部落的生産関係につながることによつて部落構造の構成の一分子となる。「家」と「家」の相互関係が野積の部落である。人は必ずいずれかの「家」に属し、その「家」の一員であることによつて「野積」の成員となる。その「家」とても「野積」という共同体を離れて存在はしないわけである。（系譜関係のない人はいずれか適当な本家をみつけて、その「まき」に入る。）

こうして形成された「家」や「部落」は「三十六人衆」の規制をうける。「三十六人衆」は部落秩序の中心となり、部落の日常生活や行動様式の型をつくりあげている。ここでみられる「三十六人衆」の層は注目する必要がある。磯田教授の指摘される「日本の村落構造は二つの顕著な「型」に大別され得る。一つは家格制の存在する村落であり、他はそれの存在しない村落である」¹²⁾という見方からするならば野積は家格性の存在する村落で、「三十六人衆」とのつながりにおいて評価さ

れる「家」を媒介とする身分制的ヒエラルキーの存在する村落である。川島教授の指摘によれば身分階層制¹³⁾ということになる。身分的ヒエラルキーと身分階層を同じものとみるかどうかは問題は残されているが、「階層は、生産手段の所有関係や搾取関係に基づくのではなく、格 rank と顔 prestige とに基いて形成されるところの、人の——日本の農村では、まず「家」の——社会的地位を区別する横断的な層である」¹⁴⁾。野積の場合を考えると漁業や土地所有からみれば生産関係の所有関係が強調されるけれども、日常生活の面では本家・分家の温情関係であり、本家の層が「三十六人衆」であり、分家が「こやけ」であり、「おもだち」「こまえ」は野積部落における「家」の社会的評価による横断層とみることが出来よう。ヒエラルキーにみられる頂点というのではない。「三十六人とは、どういう訳で出来たのでしょうか、昔はきつと、みんなでおたがいに出しあつて、村の人達を助け合つて、そしていつも明るい住いよい村にしてゆこうではないかと発足したのが三十六人だと私は信じております。」¹⁵⁾と村びともいうように、本家・分家の「分」に応じた生活様式の中で安心を得たものである。それは「一人の家長の下で秩序ある生活をしており、都会の同居人のように喧嘩などするようなこともない」「分家は本家に対してあくまでも義理を守つて“てつだい”に出かけて働いてこななければならない」「仲人は必ず嫁入先の本家である」というふうに、野積としての共同体としての調和——「和の精神」を「家」との関係においてとらえられている。野積の平和は「家」を媒介とした情緒的伝統が支えており、日常行動の規範が「義理」ということになり、身分的階層制が末端まで浸透し固定することになる。

「三十六人衆」にとっては昭和4年に制定された野積重立組合定款によつて、「三十六人衆」を中心とした部落構造とその支配原理は「おきて」というふうに実定法的規範として再編成されている。「野積地形図ハ製作中多少粗略ノ点アルモ……地券終了当時申伝ヒアルモ茲ニ改メテ実行スル」と伝統を背景にした超世代的な「家」としての「三十六人衆」は制度的な意味をもたせている。

部落ではあとで述べるように「三十六人衆」に対する批判もあり、むかしのように、服従を自明のものだと、確信をもっているわけではないが、「三十六人衆」のなかには町長¹⁶⁾、町会副議長という役職にあり、国家機構と結びつくとか、杜氏組合という職業に関係して部落の人の生活機会を支配しているから、「三十六人衆」の支配は新しいうごきの割には固定している。それを直ちに、野積重立組合定款を「三十六人衆」が「おきて」といつているからといつて、実定法的とみることは出来まい。

しかし、「三十六人衆」の支配が実定法と異なるにしても、部落の人に現実の行動に事実力をもっているならば、国家法は二次的なものとなる。野積における限り「三十六人衆」は正当性をもち、そこから展開する規範は正しい規範となり、その違反に対しての制約はある。

今 後 の 課 題

日本の農村の類型としてみると「家」はいくつかの階層に分けられている場合が多いが、野積の場合は二つの階層しかないということ指摘したい。安定しているときには問題はない。社会的な力 Social force が対抗し矛盾する場合、どちらの力によつて部落秩序が強化されるか、否定されるかということが問題になる。例えば昭和4年の場合は「三十六人衆」の「おもだち」支配によつて部落支配は安定したとみられよう。しかし、現在農地改革による土地所有の変化、民主主義思想による家柄や家格の観念が批判され、「三十六人衆」を成立せしめた歴史的條件は変化している現在、社会的な力がどのように展開するか一つの課題となる。

二つの階層しかないことは、新しい社会的な力があらわれると、「階層的支配は赤裸々な力の関係として不安定なもの」¹⁷⁾となる。いますぐに野積の力関係を測定することは出来ないが、その力関係の現実をとりあげてみよう。

1. 太子講の賃金決定

大工、屋根職人の講である太子講は職人に関係のない「三十六人衆」常会によつて賃金を決定するのは不当であるとして、昭和14年自ら賃金を決定することを宣言した。漁業は衰退し、本家・分家の協力による家族労働の生産関係もなく、耕作面積も狭く、第三分家以下になると土地の分与もなく、手に職をもつて独立するものが多くなれば、「家」の関係だけで利害関係や対抗関係をばかすことが出来なくなつた。

2. 野積文化の会を中心にしたうごき

戦後野積の文化運動として、「ペンクラブ」「文化の会」などが結成されたが、保守・革新の色彩が濃く、昭和27年には解散している。その後、昭和29年「野積文化の会」が結成され、雑誌「ひかり」を発行している。発行部数は200部を数えている。初期の内容をみると「野積の封建性」という論調が多いが、号が進むにつれて「三日でま」「区長制」「砂丘地開田」「割地」問題を取りあげ、「三十六人衆」の村落支配を批判している。それは同時に政治的な運動にもなっている。

3. 野積砂丘地開拓事業をめぐる問題

大河津分水の土砂の流出によつて堆積された砂丘地40町歩の開墾が進められているが、入植者増反者をめぐつて伝統的な土地所と個人所有との問題がある。いまこの問題に直ちに測定することはできないが「家」の問題がどのように見直されか現実の問題である。

野積の人たちは規範を規範として意識することなく「三十六人衆」を中心とした自分の「家」を基準とした価値体系によつて行動をして来た。いま野積には新しい動きと古い伝統的な諸関係がある。「三十六人衆」は古い「家」を温存させて来た。しかし、現実に動いている家族生活にはそれ自身の法則はあるが、「三十六人衆」がいつまでも、それを矛盾なく包括するものであるかどうか、新しいものに転化するものであるか、予測するのも一つの課題である。この課題に答えるには、部落意識がさらに追求されなければならない。客観的な判断をするには余りにも直接的であり、現に進行中のものが多いので、その時機をまちたい。

註

- 1) 橋浦泰雄「日本の家族」1頁
- 2) 川島武宣「近代社会と法」58頁
- 3) 文部省「臣民の道」84頁
- 4) モノグラフとしてはいくつかあるが、ここでは整理されたものとして、古島敏雄編「山村の構造」、磯田進編「村落構造の研究」、潮見俊隆編「漁村の構造」、川島武宣「イデオロギーとしての家族制度」、潮見俊隆編「日本の農村」をあげておく。

- 5) 三島郡野積村 組長 源之助

申し渡の趣

その方儀役職年来精励格勤付為御賞此旨申渡

文化丁六月

御役所

- 6) 一札の事

- 一 私此度勝手に付三左エ門舟買請漁業仕候然所私是迄貴殿の舟水主にて漁業仕居り上は末々共に水主一人貴殿の舟に乗組申し可く候万一乗組申さず候場合分家の節貴殿より譲受け申宅地御取揚げなされるべく候

其の節一言彼是と申出聞敷く候

後日の為親類連印証文仍つて如件

文政三辰年八月

某

親類

某

同

某

重右=門殿

7) 野積重立組合定款

- 第一 条 本組合ハ野積重立組合ト称ス
第二 条 本組合ハ野積大地主タル三十六人ヲ以テ組織ス
第三 条 本組合ハ事務所ヲ星寛平宅ニ置ク
第四 条 本組合ニ於テ騒乱及ビ地籍ニ関スル争論アル時ハ是レニ立会シ裁決スル事
第五 条 野積地形図ハ製作中多少粗略ノ点アルヲ以テ境界論ニ対シ地形図ノ表面ヨリ裁決ヲ得ザルハ地券終了時ヨリ申伝ヒアルモ茲ニ改メテ実行スル事但シ参考ノ点ニハ使用ヲ得ル
第六 条 野積地内三十六人割田地ニ対シ参ケ年毎ニ抽籤ヲ以テ配当スル慣例ハ後年ニ至リ誰レノ名目ニ変更アルモ之レヲ実行スル事
第七 条 本組合ノ共有地ハ納税上別冊三十六人持調書ノ通り明治二十一年各自ニ分筆シアル土地ハ抵当物件ニ提出スル事ハ固ク禁スル事
第八 条 共有地ニ対シテハ三十六人タル系伝ニ鑑ミ權利ヲ尊重スル事若シ破財上止ムヲ得ズ売買セントスル時本組合ノ議決ノ結果組合ニテ相当ノ價格ヲ以テ受持ツ事
第九 条 共有地内ニ宅地ニ貸付アル地籍ニ対シ其ノ人ヨリ他所ト更換ノ諸願アルモ爾後之レヲ採用セザル事
第十 条 本組合ハ左ノ役員ヲ置ク
一 地籍委員 貳名
第十一 条 本組合ノ地籍委員ハ野積地籍及ビ共有地ニ関スル一切ノ事務ヲ掌ル
第十二 条 本組合ノ役員任期ハ満四ケ年トス 但シ再選ハ妨ゲズ補欠選挙ニ依リ就任ノ役員ハ前任者ノ任期ヲ継承ス
第十三 条 本組合ノ役員ハ總テ名誉職トス
第十四 条 本組合ノ議会ヲ要スル事項左ニ

- 一 定款ノ変更 二 共有地植林事業 三 経費予算等及ビ賦課徴収方法
四 其ノ他

昭和四年四月三十日

加藤 熊吉	河野 熊一	加藤 平治	河野 熊治
志田 昇一	風間平治郎	古川原文平	吉井 基平
風間 松蔵	河合丑太郎	河合庄太郎	古川原七五三吉
藤井大五郎	大倉利平次	力石 安吉	高綱 三作
加藤 芳蔵	松井 留次	松井 栄作	松井 与松
松井 和吉	青木高次郎	青木 長吉	深滝亀次郎
青木 倉作	青木作次郎	深滝和五郎	藤井三太郎
高綱 政雄	石井石太郎	石井 石松	高津 文平
高津 峯吉	青木 政吉	石井清次郎	

- 8) 戒能通孝「法律社会学の諸問題」10頁
9) 野積文化の会発行雑誌「ひかり」第8号7頁
10) 文部省「臣民の道」71頁
11) 文部省「臣民の道」82頁
12) 磯田進「村落構造の二つの型」(法社会学1号50頁)
13) 川島武宣「農村の身分階層制」(日本資本主義講座第8巻406頁)
14) 川島武宣 前掲

15) 前掲 ムひかりク4号7頁

16) 寺泊町長は野獣の高網三作氏で四期連続当選している。得票数をみるとつぎの通りである。昭和25年7月20日、高網三作 2800, 大丸常松 2400, 本間淳夫 1200。昭和29年7月20日 無競争 当選。昭和33年7月20日、高網三作 3412, 藤田茂男 2209, 鈴木正作 2205, 星恭四郎 781, 小田俊子 3。昭和37年7月20日、高網三作 3574, 竹内麗蔵 2467, 鈴木正作 2290, 田富寿恵 0。

いま投票数の分析はしないけれども、選挙というデモクラシーの方法が伝統的なものとどのような関係をもっているか究明する課題がある。

17) 川島武宣 前掲 432頁

この階層制がいくつの層に分かれている場合は割に赤裸々な力関係としてはあらわれない。十日町市赤倉の場合は、六つの層に分かれている。(拙著「越後の女性とその社会的背景」参照) その批判は別にして固定して安定している。系譜関係と土地所有面積が大体比例し、その変動は少いからである。漁村の場合は網元と舟子の関係はみられるが「板子一枚下は地獄」の舟子相互には極立つた階層はなく、網元、舟子の階層で条件の変化によって赤裸々な力関係になりやすい。